

Title	未来に種を蒔け
Author(s)	芳賀, 力
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume29, 2015.3 : 27-43
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5518
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

未来に種を蒔^まけ

芳賀 力

一 自足アイランドの伝説——不思議の国のアリスたち

最初に、現代社会の状況をよく言い表しているかのように思える一つの寓話^{ぐわ}を紹介したいと思います。

昔々あるところに、一つの島がありました。島には種々雑多な人々が住んでいました。とても気持ちの良い島で、誰もがそこに住むことに満足していました。魚を獲ったり沿岸をカヌーで回るぐらいはしますが、島を離れようとする者は誰一人いません。実は島の住人はみな難破した人々の末裔^{まがい}だったのですが、その記憶もおぼろげになり、人々はそれについて公に語るのを好みませんでした。このすばらしいと思われる島での暮らしを否定する発言だと受け止められかねないからです。

ある日のことです。緑色のビンが浜辺に打ち上げられました。住人の一人がそれを拾い、中に紙が入っているのを見つけました。そこには「助けは近い」と書かれていました。彼には意味がよく分かりません。島の中

の世界は完璧に幸福で、充足していたからです。自分が助けを必要としているとはまったく思ってもみないことです。しかし何かが心に残りました。

数週間後、またビンを拾います。「助けはまもなくやって来る。あきらめるな」。彼はそのことを友人に打ち明けます。二人は一緒に浜辺にやって来て、ほかにビンはないかと探しました。「助けは去った。だが氣を取り直せ。助けは必ず来る」。彼らにとって不可解であったのは、自分たちに助けが必要だとは考えてもいなかったからです。

ビンの中のメッセージは、それまで知らなかったものについて、彼らの内なる何かを揺り動かし始めました。よく生きるということは、自分たちの持ち合わせの言葉が表現しうる以上の大いなるものなのかもしれない。島の内側よりも外側にこそ、より大いなるものが存在するかもしれない。そういう思いが芽生えました。やがてそれを聞いた島の住人の中から、毎朝一緒に浜辺を探し回り、集めたメッセージを互いに読み合う人々が、次第に現れ始めていったのです。

この寓話に出てくる島とはいったいどのことでしょうか。私にはこれが、現代の社会、そして特にこの私たちの島国ニッポンのことではないかと思えてなりません。もちろん今私たちのまわりで、理想の社会が実現しているわけではありません。不平不満は至るところに存在し、やり場のない怒りが鬱屈しています。しかしそれでも人々はこれまで通りの自分たちの考え方、何となく存在している習わしに従って物事を判断し、自分たちの知恵を絞って何とか無難に対応します。みんなが従っていることに自分も従う。みんながいいと言えばそれが一番いい。そういう内側の論理が物を言う世界です。これもまた国民性なのでしょうか。

ここで問題なのは、ただ論理が内向きだというだけではありません。みんながそう考えているというその中身が、結局のところ本当は、自分を中心とする内向きのベクトル（方向性）を持つてしまっているということです。島、アイランド（Island）とは、アイ・ランドすなわち自我の国（I-land）でもあります。自我が居心地よく守られている限りでは人とうまくやっていきますが、自分の思い通りにならないと、極度のストレスを抱え込んで時に爆発してしまいます。まわりの人に合わせるということも、結局は自分が居心地よくありたいための選択です。しかし、いずれにしてもそこから抜け出そうとはしない、いやそもそも抜け出す必要を感じていないということに、実は大きな問題が潜んでいるのです。

さて、皆さんの中にはこの聖学院に来て初めて聖書に触れたという人もいます。聖書という書物は、この世界を造られた神が、神に背を向けて互いに滅ぼし合うような私たちの世界を憐れんで、救おうとしておられる、その救いの歴史を知らせようとしているものです。しかしその聖書の言葉は、残念ながら自己充足している私たちにとって、ひよっとして流れ着いた瓶の中の紙切れのようなものでしかないでしょう。初めて読んだ人は、いったいこれが何を意味するのかまったく分からず、意味不明の文章にしか見えないことでしょう。しかしそこに書いてあることは、本当は私たちが考える以上に大切なこと、そう私たちはこの閉ざされた島から救い出されねばならず、そしてその救いの手が今差し伸べられているのだということなのです。救いは私たちが自分たちで内側から作り出せるものではありません。救いが起こるとすれば、それは外から、いや本当は上から来るものなのです。聖書が伝えようとしていることは、そのような救いをもたらす神の出来事なのです。今私たちはそのようにして、瓶の中の紙切れを寄せ集めて、そこに記されている隠された救いのメッセージを読み解く必要があるのです。

二 善く生きるということ

皆さんも知っている古代ギリシアの哲学者ソクラテスは、アテネの若者たちに向かつてこう訴えました。「大切にしなければならぬのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということなのだ」と。ところがアテネの若者たちは、その日その日をただ生きることだけに満足し、物事を自分でよく考えず、時代任せ、人任せで人生を消費していました。ひよつとして私たちもそうであるかもしれません。いったい自分は一回限りのこの人生を何のために用いようとしているのか、面倒くさいからあまり考えずに、流れに身を任せて生きているとすれば、本当に生きているとは言えません。ただ生きていうだけでは、せつかくの命を与えられているのに、あまりにももつたないことです。ひよつとして私たちは命を無駄にしているのかもしれない。

つい先日、ある新聞の投稿記事に目が止まりました。皆さんもよく覚えていることかと思いますが、東京オリンピック招致が成功させるのに大いに貢献したプレゼンターとして、パラリンピックの佐藤真海選手が、被災地出身ということもあり、一躍脚光を浴びました。その彼女の姿を見て、一年前の六月に滑膜肉腫で息子を亡くした一人の父親が寄せた文章です。はじけるような笑顔を振りまく佐藤真海さんですが、一九歳の時に肉腫を発病し、右膝以下を切断したわけです。いったいどこからどのように切断する勇氣と決断を得たのだろうと、このお父さんと思うのです。自分の息子は高校二年の冬に発病し、高校三年の春に滑膜肉腫と宣告されたそうです。治療法のうち下腿切断という道は、五体満足でない身体など考えられないと言う息子の思いに押されて、選択肢からはずした

そうです。結果として腫瘍切除と放射線治療になりましたが、大学二年の秋に再発し、遅まきながらの下腿切断となりました。しかしその時には肺に転移が見つかり、その後は言葉にならないほど苛酷な治療の末に、泣きながら死を迎えることになったそうです。最初の発病から四年と六カ月。もし発病時に下腿切断を息子に説得できければ、状況は変わっていたかもしれないと、家族は後悔、後悔の毎日であると、そう手記は綴られていました。おそらく本当に辛く悲しい、やりきれない思いで、あの佐藤真海さんの笑顔を見つめていたのではないかなと想像します。

命の大切さを本当に思わせられます。ただ漫然と生きていてよいのか、何だかふがないと思いますし、生きてくても生きることのできない人に対して、申し訳ないという思いにさせられます。

私たちの国は東日本大震災を経験しました。そこで改めて問われたことは、〈生と死〉という根本問題です。それは、ふだんは考えない、そして考えたくない問題であるかもしれないかもしれません。しかし、それは、見て見ぬふりをするこのできない問題であり、どうしても一度はどこかで考えなければならず、考えたほうがよい問題なのです。

そしてまさにそういうところでこそ、私たちは聖書の言うことに耳を傾けたいと思うのです。聖書は不思議な書物であり、緑色の瓶に入っている紙切れほどの意味しかなかったかもしれないものですが、本当はまさにそこにこそ、この〈生と死〉をめぐる大問題に対する本当の解決が示されているのです。

三 開始され、今も続いている救いの歴史

聖書の中で、主イエスの教えと行動について伝えているものが福音書と呼ばれるものですが、そこにはたくさんのたとえ話が載っています。その一つ、ルカによる福音書の一五章には、三つの失われたものたえが載っています。

まず最初に出てくるのは、皆さんも一度は聞いたことがあると思います「見失った羊」のたとえです。そこでは、いなくなつた一匹の羊のために、九九匹の羊を野原に残して探しに行く羊飼いの姿が描かれます。

次に出てくるのは「無くした銀貨」のたとえです。一〇枚の銀貨のうち、たつた一枚を無くしてしまつたことで、見つけるまで家の中を探し続ける主婦の話が出てきます。

そして三番目、最後に出てくるのが「放蕩息子」のたとえです。ある父親に二人の息子がいて、弟のほうが財産の生前贈与を要求し、自分の分け前をもらうや、父のもとを離れ、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして全財産を無駄使いしてしまつたという話です。彼は食べるものにも困り、四つん這いになつて豚の食べるいなぎ豆を食べてでも腹を満たしたいと思つほどに、人間の尊厳を失ひ、自己を見失つてしまいました。しかしそこではたと我に返り、父のもとに帰ろうと決意します。すると父は、失われた息子が帰つてきたというので、まだ遠くからその姿を認めただけなのに、走り寄つて彼を抱き締め、接吻しました。「私は罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」と言うこの我が子に対して、父は最良の服を着せてやり、手に指輪をはめ、足に履物を履かせ、肥えた子牛を屠^{ほふ}つて、最大の祝宴を開いたのです。「さあ食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返

り、いなくなっていたのに見つかったからです。そう父は言って心から喜び祝ったということです。私たちは、自分がそう考えているよりもはるかに尊厳に満ちた存在、神の形にかたどって造られた存在であり、神の愛の輝きを映し返して愛に満たされて生きる存在なのです。

この主イエスのたとえ話は、神とはいかなるお方なのかを明らかにする物語です。神は失われた人間を見つけ出し、本来属している神の愛のもとへと連れ戻す方、身勝手な生活の故に人としての尊厳さえ失っていた人間にもう一度神の子供としての尊厳を取り戻させようとする方だということを、聖書は語ります。そしてまさにそのために、さ迷い出た私たち一人ひとりを探し出し、連れ戻すためにこそ、このたとえ話を語られている主イエスご自身が、人間のところに到来されたのです。一匹の羊のために、羊飼いである方が命を落とし、尊い犠牲を払って、失われた羊の命を贖^{あがな}つてくださったのです。

ここから救いの歴史が始まりました。聖書が伝えるのは、この時、地球の片隅で開始された救いの歴史が教会を通して世界中に広まり、今も広まっております、その広まりゆく歴史の運動の中に日本の教会も、そしてまた皆さんのこの聖学院の歩みもまたあるということです。それはすなわち、皆さんの一人ひとりが、自分では気づいていないと思いますが、実はこの大きな神の歴史のうねりの中に既にいるのだということです。

四 人生の転機——自分を越えるチャンス

このうねりの中で、ぜひ皆さん一人ひとりがこの大学にいる間に、聖書の証しする生ける神に出会ってほしいと思います。少なくとも流れ着いた瓶の中の紙切れに気づいて、それを読み、それがいったい何を意味しているのか、

少しでもいいから考えてほしいと思います。特に困った時、人生が思い通りに行かなくなった時にこそ、聖書の御言葉に耳傾けてほしいと思います。

確かに人生というものは、思い通りには行かないものです。誰でも自分で自分の人生にシナリオを描くものですが、まさに実際の歩みはシナリオ通りには行かないものでしょう。しかし、その挫折の時こそ、チャンスなのです。

挫折を歓迎する

もう今から随分前のことになります。妻の実家が福島なものですから、いつも夏にはそこを訪れていました。小さな町ですが、そこにキリスト教主義の聖光学院という、今では高校野球甲子園の常連になっている学校があります。そこが県の代表で初めて甲子園出場となった時のことです。県大会の決勝を五点差を跳ね返しての大逆転で劇的に勝ち抜いてきたチームですから、地元の期待もいやがおうにも高まっています。ここは代々、院長、校長、理事長が福島伊達教会の主だった長老たちです。校歌を作った方も牧師の娘で、私どももよく知っています。当時の校長は牧師でもあり、神学校時代、机を並べた仲です。そんなことで、町を歩けば、エースの歌川君甲子園出場おめでとう、がんばれ、などという垂れ幕が商店街に下がっています。全体で八千万円くらいかかるという費用を急募金で集め、バスを三台連ねて応援に出かけたそうなのです。近所の高二の男の子も即席のプラスバンド部員として徴集されて出かけました。ところが、意気込んで臨んだその試合、土曜日でしたが、何と二〇対〇で負けてしまいました。テレビで見えて、まあ打たれるわ、打たれるわ、ピッチャーも投げる球がなくなるほどの痛しさで、見るに見かねるという有様でした。翌日の日曜日、教会で皆さんにお会いしても、こちらからかける言葉もない。夜通し高速を飛ばしてバスで帰ってきた校長も、ちゃんと礼拝に出られた。これはえらいと思いきや、その

日もバス代の募金活動があったからで、挨拶もそこそこ寝に帰られました。町中がどうも元気がない。私もその気持ちに感染して元気がでない。新聞のスポーツ欄も見る気がしない。そんな折、その新聞に「君という夏甲子園」という題で、将棋の谷川浩司名人が文章を寄せているのを妻が見つめました。

「0—20。聖光学院の大敗でゲーム終了。勝者の校歌を敗者が聞く。勝負の厳しさを一番感じる瞬間です。……将棋は自分で負けを認めねばならないゲームです。『負けました』と言って頭を下げるのが正しい投了の仕方。つらい瞬間です。でも、『負けました』とはつきり言える人はプロでも強くなる。これをいい加減にしている人は上に行けません。ベテランが息子みたいな棋士と対局して敗れたときは正直、頭を下げるのはつらい。ですが、これができないと勝負の世界ではやっていけない。高校野球でも敗者は相手の校歌など聞きたくないはず。グラウンドからすぐにでも逃げ出したい心境でしょう。しかし、我慢して聞くことが次につながるんです。私も棋士になってから500回は頭を下げました。……4150校のうち頂点に立てるのは1校だけ。あとはすべて負けます。将棋でも野球でも負けることで免疫が得られる。社会に出たらいろいろな競争が待ち受けているはずですから、早いうちから少しずつ挫折を経験することは必要なのではないでしょうか。その意味で、聖光学院の応援団が最後まで懸命に応援していたのが印象に残りました。立派だと思いました」^③。

逃げずに負けを認める。悔しいけれども、負けましたと言って頭を下げる。それが人間を成長させる出発点、だということです。そういうことができないと、いつまでも新しく出発できない。負けず嫌いの私などにはなかなかできない芸当だと思いましたが、読み終えて不思議に元気が戻ってまいりました。

人間というものは、人間に対して意地を張る存在です。そして何よりも神に対して私どもは意地を張る存在ではないかと思えます。こちらが悪くてもなかなか謝ろうとはしない。負けを認めたくない。それでなかなか悪循環を抜け出せないのです。邪悪な心に取り憑かれたままではいるのです。しかし大事なことは、「神様、負けました。降参です。私が間違っていました」。そう認めることではないでしょうか。私たちが神の前に立ち、神様、負けましたと言えるかどうか、そのことに私たちの本当の出発が懸かっています。私たちが自分たちを縛っている悪循環、悪しき思いから抜け出せるかどうか懸かっています。しかも聖書の神は力ずくで私たちをねじ伏せるというのはなく、愛そのものとして私たちの前に立ってください、私たちに新しい出発を与えてくださる方なのです。

大事なことは、人生において本当の超越に出会うということです。絶対との出会いと言ってもよい。そういう縦軸がなければ、人間というものはただ人の目を気にし、評判を気にし、窮屈な生き方に陥ってしまうものです。あるいは、なかなか自分の本当の姿に気づかず、傲慢になり高慢ちきになって、互いを裁き合う悪循環の中に陥ってしまいます。

ユダヤ系のアメリカ人政治学者で共同体論者の一人にマイケル・ウォルツァーという人がいます。この人が言っていることですが、

私たちは他者という存在の眼によって形作られた鏡の中の自分を見て、自分を評価するのが常です。そのような「自己評価（セルフ・エスティーム）」は、他者との関係に依存しており、たえず競争にさらされ、成功と失敗の間を揺れ動くものです。しかしもっと大切なことは「自己尊重（セルフ・リスペクト）」を持つことにあるとこの政治学者は言います。自己尊重は人格の尊厳への適切な関心に由来します。私が私自身を尊重するのは、他の人々との関係においてではなく、ある基準に関してであり、その同じ基準で他の人々も、私が私自身を尊重する権利があ

るかどうか判断できるのです。自己を尊重することは競争ではありません。友人の成功は私自身の成功の減少ではなく、自己尊重はみんなで共有できる財産です。

そして、本当に大事なことは、人間による評価ではなく、人生の最後に訪れる神による評価です。私たちの生涯が神に喜んでいただけるものとなるかどうかということです。今日の会は宗教改革を記念する意味もあるということとで申しますが、宗教改革者のマルティン・ルターが発見したことは、私たちの人生を義とするキリストの発見です。私たちの人生は間違いだらけ、欠点ばかり、実に過ち多きものですが、しかしこの私たちの過ちの責任を、私たちに代わって取ってくださった方がおられるということです。それが主イエス・キリストという方です。神の前で負けたと頭を下げ、ただこのことを感謝して受け容れさえすれば、神はこの欠点だらけの私たちを喜んで受け容れてくださるのです。

五 一度限りの人生を何のために使うのか

心理療法をいち早く紹介した河合隼雄かわい はやおさんがおもしろいことを言っています。実際にあった話のようですが、外国に、ある一卵性双生児の片方は大司教となり、片方は大盗賊となった例があったと言います。調べてみると、二人ともほとんど時を同じくして若い時に家出をしているのですが、片方は腹が減って盗みに入ったところを、偶然に盗賊に見つけられ、その集団に入り、そこで頭角を現して大盗賊になりました。これに対して、もう片方も盗みに入ったのですが、そこは教会で、その神父に諭さとされて回心し、ついには大司教になったという話です。

そして河合さんは、ベートーヴェンの運命という曲があるけれども、私たちの人生というものは、楽譜を与えら

れているが、演奏の自由は各人に任せられているようなものだと言います。演奏次第でまったく違うものになるからです。だから運命と言っても、大司教になる運命とか、大盗賊になる運命などというものはない。どのように歌い上げていくかは、一人ひとりの人間次第なのだと言うのです。大司教と大盗賊にしても、その後、司教のほうは地位に甘えて贅沢三昧に暮らし、神さまからおしかりを受けるかもしれない。一方、盗賊は非を悔いて財産を貧しい人に施し、後半生を聖者のように暮らすかもしれない。運命を嘆いてみたり、何とか変えられないかと無謀なことをするより、いかにそれを演奏し歌い上げるかを考えるほうが得策だと、こう言うのです。

そこで私が思い起こしたのは、ヴィクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』です。これはミュージカルになり、映画もはやって、最近でも話題になっているようです。何と言っても、見かけがぱっとしないのに、歌い始めたらあまりのすばらしい美声で世界中の人を驚かせたあのスーザン・ボイルがその中で歌われる「夢破れて」を歌ったので有名になりました。

主人公のジャン・バルジャンは、貧しい姉一家の子供たちがひもじい思いをしているので、ついパンを盗んでしまいました。そのたった一個のパンを盗んだばかりに五年の服役に処せられます。四度の脱獄が失敗して合わせて一九年も牢獄でつらい労役に耐えねばなりませんでした。

服役を終えて娑婆に出て、身分証明書ですぐに前科者と分かるのでまともな仕事にありつけません。そんな折、ミリエル司教に出会って食事をご馳走になり、泊めてもらうことになります。しかし良からぬ思いに駆られ、つい夜中に銀の食器を盗んで逃げるのですが、捕まってしまいます。「銀の食器を盗んだ男を捕まえて来ました」と告げる警官に、司教は「いやそれは私があげたものだ」と答えます。おまけに銀の燭台まで与える始末です。

それでジャン・バルジャンは無罪放免になるのですが、その途中、サヴォワ人の少年が稼いできた硬貨を誤って地面に落としたのを見て、それを足で踏んで奪い取ってしまいます。少年が泣きながら家に帰る姿を見たたん、自分は何とひどい人間であることか、司教からたった今寛大にも赦していただいたというのに、その自分の卑劣さに気づいて、大泣きに泣き、回心するのです。再び盗みを働いたのが司教館であり、その司教を通して触れた神の赦しの愛がこの人の人生を大きく変えました。彼はもはや自分の人生を欲するためには用いず、神の愛に報いる道を歩み始めるのです。

私たちには一人ひとり、神さまから授かった賜物があります。タレントという言葉は才能を意味しますが、聖書の中の主イエスのたとえ話（マタイ二五・一四―三〇）から来た言葉です。元々はタラントンというお金の単位でした。ある主人が三人の僕に五タラントン、二タラントン、一タラントンを預けて旅に出ます。五タラントン預けられた者は商売をして五タラントンもうけ、二タラントン預けられた者は商売をして二タラントンもうけました。しかし一タラントン預けられた者は、失敗することを恐れ、地中に隠していました。旅から戻った主人は、タラントンを活かした二人を誉めましたが、三番目の僕をしかりました。なぜお前は失敗を恐れ、タラントンを地中に隠していたのかと。

このたとえ話を聞いて誰もが思うことは、そもそも預けられたタラントンに差があるのは不公平ではないかという感想でしょう。しかし、才能や賜物、育つ環境は、人生のゴールではなくて、スタート・ラインにすぎないのです。そこから神と共なる冒険の旅をしてゆく、人生の出発点にすぎません。大事なことは、自分に授けられた賜物を発見すること、それを人と比べるのではなく、また失敗を恐れて地中に隠したりせずに、神と隣人のために差し

出し、用いることなのです。

六 未来に種を蒔く

聖書の宗教は希望の宗教です。そこには「未来」という視点が重要な要素としてあります。今ここで既に神と出会い、神の良き力を受けているのですが、しかしそれは未来にもっと素晴らしいものが待ち受けている「約束の力」でもあります。神はいつも約束を携えて人間に臨みます。イスラエルの民の始めとなるアブラハムは、なかなか世継ぎを与えられないのですが、「あなたの子孫は必ず天の星、海辺の砂のようになるだろう」との約束を授けられ、その希望をもって歩みます。この約束が未来を切り開き、思いもかけない仕方で実現していくことになります。

メシアとして到来したイエス・キリストの誕生もそのようなものでした。ベツレヘムの馬小屋に生まれ、ナザレの小さな村で育ち、エルサレムで十字架につけられた方が、やがて世界の歴史を塗り変え、異邦人の王となり、世界を救う救世主になるなどと、いったい誰が考えたことでしょう。しかしそれもまた神の約束が実現していく過程なのです。

過去のことはどうしようもありません。そこにいつまでもこだわらず、くよくよし続けても、前に進むことはできません。

二〇一一年三月一日の津波の後、気仙沼市はしかみ階上中学校では、少し遅れて卒業式が行われました。その中で、梶原雄太君という生徒が答辞を読み、その様子がユーチューブで流れて話題になりました。私もそれを見ました。親

しい者を失った彼は、こらえる涙を押さえきれず、途中でそれを何度も学生服の袖で拭いながら、懸命に歯を食いしばって、答辞を読みました。お腹の底から声を振り絞るように、答辞を読む。まるで自分にそう言い聞かせるようでした。「自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。辛くて、悔しくて、たまりません。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きてゆくことが、これからの私たちの使命です」。そう彼は宣言するかのように、言い切りました。一五歳の少年の決意表明でしたが、大したものだと思います。

これには全国から大きな反響が寄せられたそうです。その画像を見た一人、福岡に住む男性は、九年前に火事で自宅を全焼し、全財産を失った人でした。その後、鉄工所の経営も不況の波が押し寄せてうまく行かず、何かという火事のことを思い出し、自分の不運を恨み続けたそうです。しかし、「苦境にあっても、天を恨まず」という少年の答辞を聞いて、目から鱗が落ち、前を向いて生きようと思ったということです。それからこの方は、福岡から被災地に支援物資を送る会を立ち上げて、何とか少年の思いに応えようとしているそうです。

この少年はその後、岩手にある高等専門学校に進み、コンピュータを学び、災害情報をいち速く伝えるシステムを開発するという夢に向かって歩き始めたそうです。

今日の講演に「未来に種を蒔け」という題をつけました。種を蒔くというたとえもまた聖書によく出てきます。先ほど読んでいただいたホセア書一〇章一二節以下にこうあります。「恵みの業をもたらす種を蒔け。愛の実りを刈り入れよ。新しい土地を耕せ」と。新しい土地を耕す。それは未来を開拓することです。そしてそこに恵みをもたらす種を蒔く。するとそこから愛が豊かに実り、それを私たちは人生の最後に刈り入れることができるのです。

ところがどうでしょう。イスラエルの民はそうはせず、「悪を耕し、不正を刈り入れ、欺きの実を食べる」という愚かな選択をしてしまいました。そのことは私たち一人ひとりの人生においても起こりうることです。悪を耕し、悪の種を蒔き、不正を刈り入れて欺きの実を食べる人生を歩むのか、それとも神が指し示しておられる未来を耕し、恵みの種を蒔き、愛の実りを刈り入れるのか、その違いは大きいのです。ここで預言者は「新しい土地を耕す」という言葉の後にすぐ「主を求める時が来た」と続けています。新しい土地を耕すということは、今、主を求め、未来に種を蒔きなさいということなのです。耕し、種を蒔くということは、時には辛いことです。しかしその辛さを避けてはなりません。悲しみの中でも未来に種を蒔くということもあるでしょう。でも聖書はこう語ります。「涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる」（詩編一二六・五）と。

さて、最後に私は皆さんに訴えたいと思います。未来に種を蒔くということは、もつと言えば、未来の種を蒔くということです。未来の種、それは聖書の福音です。福音とは喜びの訪れを意味します。神がイエス・キリストにおいて世界を救済する歴史を開始してくださったということの良き知らせです。福音は未来の種です。そこには神の国の未来が宿っている。このことをまだ知らない人々がいるのなら、それを知らせる必要があります。それを知らないばかりに未来を夢見ることができず、暗い気持ちに落ち込んでいる人に、この未来の宿った種を手渡す人間が必要です。それを伝道者と呼びますが、東京神学大学は日本にあってこの伝道者を養成する大学です。これは最後にとんだ手前味噌の自己宣伝になってしまいましたが、皆さんの中からも、ぜひ未来の種、希望の種を蒔く仕事に生涯を賭けたい、そのように人生を用いたいと思う方が現れてほしいと切に願っております。

注

- (1) この寓話はE・H・ピーターソンが小説家W・パーシーのエッセイを改作しながら紹介しているもので、『牧会者の神学』越川弘英訳（日本基督教団出版局、一九九七年）、一八〇頁以下、私なりに少し手を加えている。
- (2) 『毎日新聞』、二〇一三年一〇月一二日。
- (3) 「強くなる秘けつ 谷川浩司（君という夏甲子園） 高校野球」『朝日新聞』朝刊、二〇一一年八月二二日。
- (4) 河合隼雄『ここころの処方箋』（新潮社、一九九二年）、一二四頁以下。